

むかし、朝日村に、炭焼きの権という正直な若者がいました。

ある年の暮れ、権は、裏の沢の炭焼き場で、炭を焼いていました。すると、どこからともなく一陣の風が吹いて来て、目の前にひとりのばあさんが立っていました。ばあさんは、弥彦山の弥三郎ばあさんでした。

弥三郎ばあさんは、権に、

「おれが嫁さんを世話してやるが、どうだ」とききました。権は、

「それはありがたいが、おれみたいな貧乏人の所に、だれが来てくれるものか」と答えました。ばあさんは、

「まず、おれに任せておけ」といって、また一陣の風に乗って消えました。

弥三郎ばあさんは、大阪の鴻池のお屋敷の前に現れました。鴻池では、きょう、娘の結婚式があるというので、上を下への大さわぎをしていました。ばあさんは、ずかずかと屋敷に入って行って、

「ぜひおれに娘をくれ」といいました。家の人たちは、何をばかなと、相手にしませんでした。すると、ばあさんは、娘をさらって、また一陣の風を吹かせて消えました。

弥三郎ばあさんは、権の炭焼き場にもどって来ました。権がふり返って見ると、ばあさんの後ろに美しい娘が小さくなって隠れていました。

「おまえの嫁さんだ」

弥三郎ばあさんはそういつて消えました。

権も娘も、たいそうおどろきました。娘は、初めのうちは泣いてばかりいましたが、権はやさしい若者でしたし、やがて娘も、これも運命かと思つてあきらめました。ふたりは、権の小屋で、仲良く暮らし始めました。

ある日、嫁さんは、小判を一枚取り出して、

「町に行って、みそと米を買つて来ておくれ」といって、権に渡しました。権は、さっそく出かけました。

家を出て少し行くと、がんがたくさん下りて道をふさいでいました。権は、持っていた小判をがんに投げつけました。がんは、ぱつと飛び立ちました。けれども、買い物に行こうにも、小判が無くなってしまいました。しかたなく、そのまま家にもどりました。

権が小判をがんに投げつけた話をすると、嫁さんは、あきれてものがいえませんでした。権は、

「あんな物がそんなにだいじなのか。あれなら、この沢さわの奥に、なんぼでもあるぞ」といいました。

ふたりが、沢をつたって山の奥に入ると、あたりに黄金がさんさんと輝いていました。

こうして、炭焼きの権は、長者の権と呼ばれるようになったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『伝説の越後と佐渡』中野城水著／文章院出版部